

発刊の挨拶

技術開発への思い

株式会社フジコー
代表取締役会長
山本 厚生
Atsuo Yamamoto



創業 40 周年を期に「技術年報」を発刊する事を決心し、今年で 25 回目の発刊となりました。当時は 3 回続けば、ネタが尽きるだろうと思っておりましたが、お蔭さまで 25 回も続けることが出来ました。

「鋼塊鑄型の修理技術」開発で企業を創業した弊社ですが、鉄鋼の技術革新「造塊法」から「連続鑄造法」の変革により、主力事業「鑄型修理」が激減して行くという貴重な体験をする事になりました。

この体験は主力事業が発展段階時に、次の事業開発に取り組み、次期に備える事が肝要であった事を身に染みて感じる事になりました。

技術は常に変革・発展して行く、時代を見据えて、常に先を見た技術開発に取り組まなくては生きていけない。

製造業を支えるのは技術であり、技術無き所に企業の存在は有り得ないと思っております。

上記の厳しい体験で創業 50 周年に「技術開発センター」を開設しました。

経営的に多少無理が有っても、常に売上の 4% の予算を組み、技術開発を積極的に押し進める事に致しました。お蔭さまで接合技術を軸に、CPC 鑄造法、鑄掛鑄造法、溶射による光触媒コート法、大型対応摩擦接合法等、数々の開発に成功しております。

特に、CPC 鑄造法は独自技術の開発で大きく進歩し、大型圧延ワークロールの製造も可能になりました。

今や世界市場を相手に競争に打ち勝つまでの存在になっております。

弊社も今年で 65 周年を迎えました。

65 周年を期に、手狭で効率が悪くなった現開発センターを閉鎖し、「新技術開発センター」を、弊社「若松響工場」の隣接地に建設することに致しました。

今後は、AI (人工知能) や 5G といった携帯通信網が進化して行きます。

特に AI は人間が機械に指示して来た事を一部代替えする技術であり、この影響は計り知れない事になると思われます。

当たり前と考えていた常識が崩れ去り、速まる一方の技術の進歩やグローバル化の奔流が、過去の経験則を猛スピードで書き換えています。

弊社技術開発も、接合技術を軸に一環性を持った方向でやって来ましたが、今後はそれだけではなく、全く未経験分野の開発も進めるようになると思います。

環境、農業・畜産、食糧、水処理その他各方面の開発テーマが有りますが、この内焦点を絞ってしっかりと開発を進めなくてはなりません。

「新開発センター」設立はその為の布石であり、この開発センターで働きたいと思われるような、センター運営をやらねばなりません。

最も大切な事は、開発を実施する各分野の優秀な技術者の確保と育成であります。

後 35 年で当社は 100 周年を迎える事になります。この 35 年間を乗り越える為には、2 つ位の山を越えなくてはなりません。

ポイントは

1、経営者がこの不確実な未来に対し、次々と確実な手が打てるかどうか、

2、「開発センター」が次期に向けてのテーマで確実に開発を実施しているかどうか、

この2つがキーポイントになると思われます。

35年先に、当社はどのような企業になっているのでしょうか？

どうやら「新技術開発センター」の役割が大きなカギになりそうです。